

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23501130

研究課題名(和文) 小学校外国語活動担当教員養成のためのポートフォリオ適用モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of a Model to Nurture Student-Teachers who Hope to Teach Foreign Language Activities at Elementary School

研究代表者

松崎 邦守 (Matsuzaki, Kunimori)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：90584160

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校外国語活動担当教員養成のためのポートフォリオ適用モデルを構築した。同モデルでは、小学校教員養成系大学の学部生が地域の小学校を訪問し、外国語活動を実践した。授業直後に、小学校の教員や大学教員と共に授業後カンファレンスを行い、その省察に基づき授業改善を行った。それらのプロセスにおいてポートフォリオを活用することにより、外国語活動の授業改善や指導スキル向上への意識が高まったことが示され、本研究モデルの実用可能性が確認された。

研究成果の概要(英文)：In this study, a model utilizing portfolios to nurture student-teachers who hope to teach foreign language (English) activities at elementary school was constructed. Based on this model, undergraduate school students visited a local elementary school and conducted English classes. After every class, the students, a university professor and elementary school teachers participated in a conference in order to reflect on and improve the English activities. The students utilized portfolios during the process. As a result, it was shown that portfolios were effective in enhancing the students' consciousness of improving the activities, as well as improving their instructional skill for the activities.

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学

キーワード：教師教育 外国語教師養成

1. 研究開始当初の背景

松川(2004)は外国語活動(英語活動)の指導に必要な資質や能力として、専門基礎技能としての英語運用能力、英語教育に関する知識及び技能、反省的実践能力を挙げている。特に、この反省的実践能力は、外国語活動が必修として実施されて間もないことから、各担当教師が Plan-Do-See-Action 理論(小田・杉原, 2010)や Action Research (Johnson 他, 2006)により実践と改善を繰り返しながらその知見を積み重ねていく必要があり、極めて重要であると考えられる。

ところで、現在、小学校に英語という教科がないことから、小学校教員養成系の大学においても同活動の教育実習に関する正規のカリキュラムはない(松川, 2004)。そこから、教育課程外で、学部生を外国語活動のゲスト・ティーチャー(以下、GT)として派遣する GT 活動が行われている。その先駆的研究例として、同活動のための事前学習を行い、授業実践の後には事後活動として振り返りの活動を行った佐々木(2004)が挙げられる。

同研究の成果を踏まえ、本研究報告者らは、「授業を批判的に内省させ、複雑で多面的である授業についてじっくりと考える機会を与えるポートフォリオ(Grant & Huebner, 1998; Klenowski, 2002)」を GT 活動に新たに導入する研究を実施した(北條・松崎, 2006; 松崎, 2008)。その結果、GT 授業をじっくりと振り返り、反省点を活かしながら授業改善を試みるなど反省的実践能力に変容が見られたこと、カンファレンスでの事実に基づく指導教員の肯定的な評価や改善へのアドバイス、仲間との学び合いが有効であったことなどを報告している。

本研究では、これまで得られた知見を踏まえ、まず、反省的実践力を育成する上で有効とされるポートフォリオを活用可能で汎用性のあるモデルを構築する。加えて、先行研究(例えば、北條・松崎, 2006)では、教育課程外での実施であった GT 活動を、実際の開設科目の中で実践する。このことは、将来的に小学校英語科およびその教育実習の導入に備える上でも重要であると考えられる。

2. 研究の目的

学習指導要領改訂により、外国語活動をねらいに沿って指導できる小学校教員の養成は、これまで以上に急務となっている。そこから、本研究の目的は、小学校教員養成系大学の学部生が、教育課程内で設定されている授業科目において、外国語活動の授業観察や実演授業を行い、それぞれの授業について他の受講者や大学教員、外国語活動の指導教諭などと共に省察し、成果と共に問題点に気づき、そして改善を図ろうとする反省的実践力を体験的に身につけるポートフォリオの活用モデルを構築し、実践の上、その効果について明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1)ゲスト・ティーチャー・ポートフォリオ・モデルの設計

先行研究(例えば、松崎・北條, 2007)を参照に、また、本研究報告者のこれまでの知見に基づき、図1に示す GT ポートフォリオ・モデルを考案した。

学生が GT として地域の小学校を訪問し、外国語活動の授業実践を行う「GT 活動」の進行に対応して、2種類のポートフォリオ(ワーキング・ポートフォリオと一見ポートフォリオ)を作成すること、松崎・北條(2007)がポートフォリオ作成過程での重要な主な活動として指摘している「状況分析に基づくポートフォリオ作成のためのガイドラインの設計とその明示」、「ゴールカードの実施」、「学びの共有のためのカンファレンス」などを組み入れること、GT 授業の「準備活動」としての大学での授業や課外での自己調整学習、グループワークによる指導案作り、「事中活動」としての GT 授業の実践、「事後活動」としての授業後カンファレンスを実施することなどを、上記「2.」で述べた目的が達成されるよう有機的に関連づけて設計した。

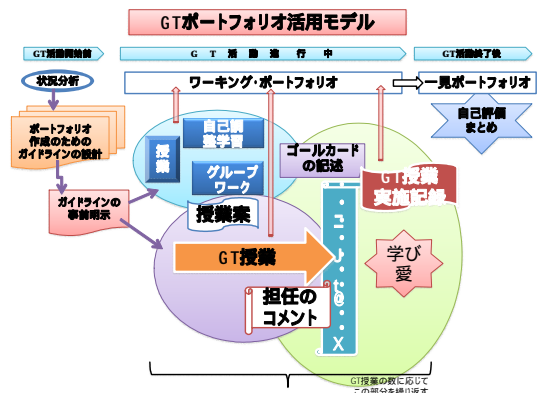


図1 外国語活動担当教員養成のための GT ポートフォリオ・モデル

(2)開発した上記モデルに基づく事例研究

上記モデルに基づき、以下の GT 活動に関する事例研究を実施し、同モデルの実施可能性を検証した。

実施科目・参加者

本 GT 活動を実施した科目は、小学校教員養成系大学の学部2年次後期配当科目の「英語教育学基礎演習」であった。同活動の実施が教育課程内であり、教育課程外実施の松崎(2009)とは異なっている。なお、参加者は同科目の受講生3名であった。

英語教育学基礎演習の概要

本科目の目標は、「小学校外国語活動を担当する教員にとって必要とされる反省的実践力の基礎を身につける」であった。また、全15週の学習内容は、第1週目はオリエンテーションおよびポートフォリオ作成のガイドラインの説明がなされた。第2週目以降の授業は、偶数週は大学で実施(計7回)され、

奇数週は附属小学校で実施(計7回)された。

具体的に、GT3名は、大学では外国語活動に関する文献講読を受講した。また、附属小学校では、まず最初の2回は、外国語活動担当教諭による実演授業(第6学年)の観察を行い、残りの5回は、GT3名による第6学年の外国語活動の授業実践をteam-teachingで行った。さらに、同7回の授業直後には、GTおよび外国語活動担当教諭、大学の本科目担当教員の三者が参加する授業カンファレンスに参加した。同カンファレンスの目的は、観察した2つの授業に関しては、外国語活動担当教諭の授業を通して、児童中心の授業デザインのための考え方や工夫点や授業で実際に生じた同教諭の児童の見取りについて気づくとした。また、GTが実践した授業に関しては、自分たちの授業を事実に基づいて振り返りながら成長した点を確認すると共に、反省点について改善への手立てを得るとした。カンファレンスまでに準備しておくことは、授業観察のメモや、児童が書いた授業の振り返りノートの記述、ワーキングポートフォリオに収められているそれまでの成果や資料などに目を通しておくこと、およびカンファレンスでの事実や根拠に基づく発言を考えておくことであった。カンファレンスは、まず、GTがお互いに率直な感想や意見を出し合うことから始められた。進行役は大学教員が担当した。時間は、60分程度であった。話し合いはGTの発言を中心に上げられ、適宜、担当教諭が児童中心の考え方からコメントや助言などを行った。最終的に進行役が話し合いのまとめを行った。なお、カンファレンスの事後活動として、GTはカンファレンスを振り返り、気づいたことや新たに学んだことなどを、GT授業観察記録あるいはGT授業実践記録にまとめた。

本ポートフォリオの概要

本GT活動では、GTは以下のとおり2種類のポートフォリオを作成した。同ポートフォリオはテクノロジーに関する環境やスキルを必要としない紙ベースのもので、クリアシートにエントリー(成果)を種類別に入れていく形式のフラットファイル(A4版)であった。

<ワーキング・ポートフォリオ>

ガイドラインにそって、本科目の学習やGT授業の成果を収集し、また、本科目の学習やGT授業過程での頑張りや成長を形成的に自己評価することを目的として、GTはワーキング・ポートフォリオを作成した。なお、ポートフォリオ作成方法やその過程での主な活動(ガイドラインの事前明示、ゴールカードの実施など)に関しては、概ね松崎(2009)を基に適用した。

<一見ポートフォリオ>

新たに本研究では、Campbell他(2007)のPortfolio at a glanceを援用し、一见ポートフォリオ(本報告者訳)という名称で実施した。同ポートフォリオの目的は、「本GT活動終了

後、ワーキング・ポートフォリオの中から、自分の成長を示す学習や実習の成果を厳選・要約して収める。また、様々なオーディエンス(ポートフォリオを見る人)に、本GT活動における学習や実習の成果を簡潔に伝える手段とする」とした。ポートフォリオの内容は、「表紙、目次、GT活動を終えてのエッセー、最も成長を示すエントリー3つとそれぞれのカバーレター」であった。

評価の方法と手続き

本GT活動が終了し、一见ポートフォリオの提出後、内藤(2002)および松崎(2009)を基にPersonal Attitude Construct(個人別態度構造、以下PAC)分析を用いて本GT活動を評価した。同分析は、自由連想を利用してイメージの個人内構造を分析する技法であり、1つの事例であっても要因を発見する可能性を備えている(内藤, 2002)。

(3)開発した上記モデルに基づく事例研究

事例研究の実施に加えて、本研究モデルの汎用性を確認するためには、一般の公立小学校での同様の実践と検証が必要となる。同実践については新潟県上越市立A小学校において実施した(松崎, 2012: 上越英語教育学会発表)。本節では、さらに汎用性を確認するために、へき地・小規模小学校での本研究モデルの実践と検証について、以下に述べる。

参加者・実施時期・実施科目・GTによる外国語活動の実施校

本GTプロジェクトの参加者は教員養成系大学の学部3年生3名であった。実施時期は2012年の後期で、英語科教育学に関する演習科目を一部活用し実施された。また、GTによる外国語活動の授業(GT授業)は大学の近隣にあるへき地小規模B小学校の高学年(6年生1名・5年生3名)の複式学級において実施された。

GT授業の概要

GT授業は、B小学校において45分間授業として計5回実施された。各指導案は児童の学びの履歴や現況を踏まえつつGTが作成した。GT授業前日までに大学の指導教員に提出され、B校宛てメールで送られた。GT授業は3名のGTによるティーム・ティーチングとして行われた。参観者は校長や教頭、学級担任を含む教諭2名、大学教員の5名であった。主な教材は"Hi, friends!"を参考にGTが考案した。主な学習内容は、第1回はGTと児童の自己紹介、第2回目は永遠スゴロク・ゲーム、第3回目は将来の夢(就きたい職業)、第4回目は将来の夢(その理由)、第5回目は将来の夢(まとめとスピーチ)であった。授業は可能な限り英語を用いて行われた。既習事項を活かし児童の気づきが促されるようinteractionが重視され子供中心の学びが展開されるよう配慮された。

GT授業直後カンファレンスの実施

GT授業の直後に授業後カンファレンスを

実施した。参加者はGT3名、校長、大学教員の5名であった。主な内容は、GTの感想に続いて、校長のコメントが述べられ、その後ディスカッション(次回の課題や改善点など)を行った。所要時間は60分程度であった。

大学でのGT授業後カンファレンスの実施

GT授業実施の翌週に、小学校でのGT授業直後のカンファレンスを踏まえ実施した。各GTは大学教員が作成したGT授業のDVDを事前に個人的に視聴し、授業で生じた事実と突き合わせながら省察を深められるよう準備した。

GT授業後レポートの作成

各GTは以上の省察活動において学んだことをレポートにまとめた(A4版1枚)。内容は、GT授業を終えての感想、児童の反応から学んだこと、カンファレンスで気づいたことであった。レポートは大学教員に提出され科目の授業でコメントがなされた。さらに、GTP実施校の校長へメールで送られ次回以降のフィードバックに活用された。

ゴール・カードの記述

松崎・北條(2007)をもとに修正し実施した。同カードには、各GTが選択したInTASC Model Core Teaching Standardsが明記された。また、同スタンダードを達成するために各GT授業の省察後に次回のGT授業に向けて取り組む具体的な手立てが記述された。さらに、GT授業後に省察において明らかになった成果や次回への課題、改善点について具体的に記述された。同カードは大学の指導教員に提出され、コメントが付加され返却された。

簡略ワーキング・ポートフォリオの作成

GTは毎回の授業に対する省察を効果的に行うことを目的として、学びを収集・省察・整理するツールとして簡略ワーキング・ポートフォリオを作成した(松崎・北條, 2007))。

評価の方法と手続き

本GT活動が終了し、一見ポートフォリオの提出後、事例研究と同様に内藤(2002)および松崎(2009)を基にPAC分析を用いて本GT活動を評価した

4. 研究成果

以上の研究により得られたデータを分析し考察した結果をまとめると以下のとおりである。

(1)喫緊の課題となっている小学校外国語活動を担当可能な教員養成に関して、反省的実践力の育成を目指す「ゲスト・ティーチャー・活動におけるポートフォリオ活用モデル」を考案した。同モデルは、従前の研究では教育課程外で自主的に実施されていたGT活動を、大学の教育課程に位置付けられている科目内で実施したことを主な特徴としている。

(2)同モデルに基づき、その実施可能性や汎用性を検証するためのGT活動を実践し、その具体的手続きや方法を開発・提示した。こ

のにより、本モデルの継続的实践と効果の検証のため継続的研究が容易になり、現在構想されている将来的な小学校英語科およびその教育実習の導入に備える上で意義があると考えられる。

(3)本モデルで導入・組み入れたポートフォリオを活用したGT授業後のGT授業カンファレンスにおいて、授業を実践した学生、大学の指導教員に加えて、小学校教員(本研究では、外国語活動担当教諭や校長)の三者が参加することにより、GTの外国語活動に対する省察力や授業改善への意欲、指導スキルなどが高まることが確認された。この手法は、反省的教師の養成にとどまらず、学び続ける教師の養成と研修のための方法を今後考案する上での参考となると考えられる。

(4)今後の課題として、外国語活動の教科化がますます現実味を帯びて議論される中、これまで蓄積されてきた知見を基に、「同活動の担当教員はどのような心構え(個人的特性)を持ち、何を知っていて、何ができないのか」など、明確な根拠に基づく養成が、今後強く求められることが予想される。そこから、本研究において開発された「外国語活動担当教員養成のためのポートフォリオを活用したゲスト・ティーチャー活動モデル」を、同教員の質保証の観点から汎用性のあるスタンダードを目的に即して組み入れることにより改善・精緻化し、実践の上、その効果を明らかにする研究が必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

松崎邦守、マイクロティーチングの設計と評価：英語科教育法の科目を事例として、日本教育工学会論文誌、査読有、第37巻、増刊号、2013、pp.193-196

松崎邦守、教育実習一見ポートフォリオ作成の効果に関する実践的研究：中学校英語科教育実習を事例として、北海道教育大学紀要、査読無し、第64巻、第1号、2013、pp.223-234

廣川統、北條礼子、松崎邦守、小学校外国語活動における簡略化ポートフォリオを活用した自己紹介に関する単元の開発研究、上越英語研究、査読有、第14巻、2013、pp.3-17

北條礼子、松崎邦守、小学校外国語活動におけるポートフォリオを活用した5年生児童の動機づけを高める授業の設計とその効果、上越教育大学紀要、査読無し、第33巻、1号、2013、pp.181-190

北條礼子、松崎邦守、小学校外国語活動におけるポートフォリオの試行に関する研究、上越教育大学紀要、査読無し、第32巻、2号、2012、pp.285-293

〔学会発表〕(計 11件)

松崎邦守、大学と地域小学校が連携する外国語活動ゲスト・ティーチャー・プロジェクトの設計、日本教育大学協会研究集会、2013年10月5日、全日空ホテル(札幌)

松崎邦守、北條礼子、InTASC Model Core Teaching Standards(2013)を活用する外国語活動ゲスト・ティーチャー活動の設計、日本教育工学会全国大会、2013年9月21日、秋田大学

松崎邦守、メタ教授に関する気づきを促すマイクロ・ティーチングの設計と効果の検討、英語授業研究学会全国大会、2013年8月18日、大阪商業大学

松崎邦守、マイクロ・ティーチングに対する省察を促すための工夫、全国英語教育学会、2013年8月10日、北海道教育大学札幌校

松崎邦守、インタラクティブ・ラーニング・ブリッジを目指した小学校外国語活動ゲスト・ティーチャー・プロジェクトに関する事例研究、日本教育工学会全国大会、2012年9月15日、長崎大学

廣川統、北條礼子、松崎邦守、小学校外国語活動における簡略化ポートフォリオを活用した自己紹介に関する単元の開発研究、日本教育工学会全国大会、2012年9月15日、長崎大学

松崎邦守、外国語活動担当教員の育成を目指して - 大手町小学校 GT 活動をラーニング・ブリッジの視点から検討して -、上越英語教育学会、2012年7月21日、上越教育大学

茂木淳子、松崎邦守、Let's Enjoy E-Time! - 地域の人材を活用した15分間の外国語活動 -、小学校英語教育学会、2012年7月16日、千葉大学

松崎邦守、茂木淳子、外国語活動に対する小学校教員の意識変容に関する事例研究、小学校英語教育学会、2012年7月16日、千葉大学

松崎邦守、田崎博久、北條礼子、ポートフォリオを活用した小学校外国語活動担当教員養成に関する事例研究(2)、日本教育工学会全国大会、2011年9月17日、首都東京大学

松崎邦守、ポートフォリオを活用した小学校外国語活動担当教員養成に関する事例研究(1)、全国英語教育学会、2011年8月20日、山形大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

松崎 邦守 (MATSUZAKI, Kunimori)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90584160

(2)研究分担者

北條 礼子 (HOJO, Reiko)
上越教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：50199460

(3)研究協力者

茂木 淳子 (MOTEKI, Junko)
新潟県上越市立柿崎小学校・教諭